

総合的な学習の時間において主体的な学びを実現する指導の工夫

— 探究のプロセスの中で見通しをもたせる振り返りシートの活用を通して —

坂町立坂小学校 古土井 享子

研究の要約

本研究は、探究のプロセスの中で見通しをもたせる振り返りシートの活用を通して、総合的な学習の時間において児童の主体的な学びを実現する指導の工夫について考察したものである。児童に見通しをもたせるためには、単元の流れに沿って自己調整学習の予見、遂行、自己内省の三つの段階を取り入れ、振り返りを生かした学習活動を行うことが有効であると分かった。そこで、探究のプロセスと自己調整学習の過程を関連付けた振り返りシートを作成し、授業を振り返るとともに、次時の学習目標を設定することで、学習の見通しをもたせた。その際、教師のアドバイスにより、児童の学習への動機付けを促した結果、児童は次時の学習への見通しをもつことができた。このことから、自己調整学習の過程を取り入れて作成した振り返りシートの活用は、総合的な学習の時間において、主体的な学びを実現するために有効であるといえる。

キーワード: 主体的な学び 探究のプロセス 自己調整学習 見通しをもたせる振り返りシート

I 主題設定の理由

次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（平成28年、以下「審議のまとめ」とする。）では、主体的・対話的で深い学びの実現が重要であると示されている。また、「総合的な学習の時間において、探究のプロセスの中で主体的に学んでいく上では、課題設定と振り返りが重要である。課題の設定に当たっては、自分事として課題を設定し、主体的な学びを進めていくようにするため、実社会や実生活の問題を取り上げることや、学習活動の見通しを明らかにし、ゴールとそこに至るまでの道筋を描きやすくなるような学習活動の設定を行うことが必要である。」¹⁾と述べられており、総合的な学習の時間において児童が主体的な学びを実現していく上では、課題設定や振り返りを重視させ、学習への見通しをもたせることが重要であるといえる。

しかし、所属校において6月に行った主体的な学びの状況に係る全校児童対象のアンケート項目のうち、探究のプロセスにおける学びについて肯定的に答えた児童は54.5%であったことから、児童は探究のプロセスに沿った学びになっていないことが分かった。また、教師を対象に同アンケートを行った結果も57.1%と低く、教師は探究のプロセスに沿った学びになっていないと感じていることが分かった。

これまでの総合的な学習の時間においても、探究のプロセスに沿った主体的な学びになっていないと考える。そこで、本研究では、主体的な学びを実現するために、児童自らが探究のプロセスを把握し、見通しをもって取り組めるような振り返りシートを開発する。この振り返りシートには、単元全体を通して探究のプロセスごとに、1単位時間ずつ課題の目的や解決方法の見通し及び本時の学習目標に沿った自らの学びの状況を記録し、履歴として残すことができるようになる。児童は、単元を通して蓄積したシートを見直すことで、これまでの学びを確認したり、次への学習課題を見付けたりすることができる。教師はこのシートを通して、児童の学びの状況を把握し、評価の観点に沿った指導を行う。このように振り返りシートを活用することは、児童の主体的な学びを実現させるとともに、資質・能力の育成につながると考え、本主題を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 主体的な学びとは

主体的な学びについて「審議のまとめ」では、学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取

り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる事であると示されている。また、広島県教育資料（平成28年）では、「受けられた知識を一方的に享受するのではなく、学習者自らが能動的に学びを展開することであり、学習者基点の学び、深い学びといった側面をもつ。」²⁾と示されている。さらに、小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編（平成20年、以下「解説」とする。）では、総合的な学習の時間の目標の中で、主体的な学びについて示されている。

「解説」では、主体的な学びについて、自ら学び、自ら考え、主体的に判断することであり、自ら見付けた課題に対して主体的に学習活動を繰り広げ、自分なりに納得できる答えを探し求め、判断できることであると示している。これらのことから、本研究における主体的な学びとは、児童自らが興味・関心をもち、発見した課題に対して自ら学び、自ら考え、見通しをもって取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学びであると考える。

2 総合的な学習の時間において主体的な学びを実現する指導とは

「解説」では、総合的な学習の時間において、主体的な学びを実現するためには見通しや計画を立て、多様な情報を収集し、整理・分析するなどして考え、まとめていく等の学び方やものの考え方を、様々な対象に適用できるように育てていくことが必要になると示している。その一連の学習活動について、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」といった探究のプロセスを通して、問題解決的な活動が発展的に繰り返されていくと示している。

広島県教育資料（平成28年）は、主体的な学びを促す教育活動の一つとして、児童生徒が自ら課題を見付け、課題の解決に向けて探究的な活動をしていく学習である「課題発見・解決学習」を挙げている。

本県が示す「課題発見・解決学習」では、その過程を「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・創造・表現」「実行」「振り返り」などがあるとしており、総合的な学習の時間における探究のプロセスに「実行」や「振り返り」の過程が加わることにより、学びの広がりが見られることから「課題発見・解決学習」の過程を本研究における探究のプロセスとする。中央教育審議会答申（平成28年）では、「主体的に学習に取り組む態度」については、子供たちが自ら学習の目標をもち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行なながら、

粘り強く知識・技能を獲得したり、思考・判断・表現しようとしたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価することが求められると示している。

本研究では、この探究のプロセスにおいて、児童に見通しをもたせ、主体的な学びを実現する手立てとして Barry・J・Zimmerman (1989) の述べる自己調整学習を取り入れて指導を行うものとする。

3 主体的な学びを実現するための指導の工夫

（1）探究のプロセスの中で見通しをもたせるとは

Zimmerman (1996) は、自己調整とは、教育目標の到達を目指す自己調整された思考、感情、行為のことであると述べている。この場合の「調整」とは、目標設定に向けて、周囲に意欲的に働きかけ、変革していくという、積極的意味を含めている。そして、自己調整学習は、図1のような、予見段階、遂行段階、自己内省段階といった三段階で構成される循環的なサイクルであると述べられており、それぞれの段階には、過程がある。その過程には六つ示されており、課題分析、自己動機付け信念、自己制御、自己観察、自己判断、自己反応がある。さらに、各過程は14の構成要素に分類されている。そこで、本研究では、学習に見通しをもたせるために、予見段階における課題分析の過程の構成要素である目標設定、方略プランニングと自己内省段階の自己判断の過程における構成要素である自己評価を活用する。さらに、予見段階の自己動機付け信念の過程について、本来は、児童自身が行うものであるが、発達段階を考慮し、教師によるアドバイスとして活用する。

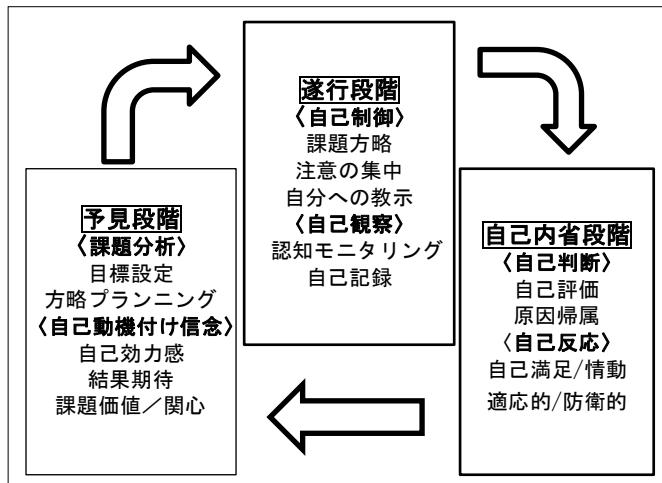


図1 Zimmerman (2000) の自己調整の諸段階と諸過程

表1 本研究に取り入れる「自己調整の諸段階と諸過程」における構成要素の定義

段階	段階について	過程	構成要素	定義
予見	学習に先行し、学習を自己調整する準備と意欲に作用する学習過程と動機付けの源のこと。予見段階の内容や特徴は、遂行段階における学習のプロセスに影響する自己調整学習の初期段階において特に重要な役割を果たす。	課題分析	目標設定	授業、単元などの一定の時間内で、特定の学習結果を出すという約束のこと。（塚野州一）
			方略プランニング	有意な学習方法（学習方略）を選択したり組み立てたりすること。（伊藤崇達）
		自己動機付け信念	自己効力感	一定の結果へ導く行動を自らがうまくやれるどうかという期待、自信。目標を達成できるという信念。課題や対象に対してもつ肯定的な見通しのこと。（Zimmerman）
			結果期待	人が行動を起こす際に、どうすればその結果に至ることができるか期待すること。（中谷素之）
		課題価値/関心		課題が個人的に重要であると価値付けること。（Wigfield, Tonks, & Eccles）
遂行	学習中に生じ集中と遂行に作用する過程。遂行段階における過程は、結果として自己内省段階での影響に大きく関わってくる。	自己観察	認知モニタリング	課題に対し、そのときよりもうまく対応できるよう制御するはたらきのこと。遂行過程と結果を自分の心の中で跡付けること。（塚野州一）
自己内省	自己の結果に対して作用する過程のことであり、次の学習に関する予見に作用する。	自己判断	自己評価	自分の遂行を基準と比較すること。自己の学習の進度を評価する。予見段階の生徒の目標設定は、生徒が自己内省段階で自己評価するために使う規準に影響するとされている。（塚野州一）

塚野州一（2016）は、自己調整について学習課題に応じて調整する固有な過程を選択し実行することとし、その過程には、次の①～⑧のようなものがあると述べている。①自分自身で固有の近接した目標を立てること②目標に達するための有効な方略を探ること③進歩を確かめるために遂行過程を選択的にモニタリングすること④目標を達成しやすいように物理的に環境と社会的環境を再構成すること⑤効果的な時間の使い方を工夫すること⑥方法を自己評価すること⑦結果には原因があると考えること⑧これから学習方法を調節することである、と述べている。つまり、探究のプロセスも自己調整学習も課題設定と自己評価が重要であり、目標達成に向けた単元計画及び授業計画において、振り返りを生かした課題設定を行えば、児童は学習に見通しをもち、主体的に学ぼうとするサイクルが展開していくと考える。

これらのこと踏まえて、所属校児童の実態に基づき、図1「Zimmerman (2000) の自己調整の諸段階と諸過程」について構成要素を選択し、塚野（2012）及びZimmerman (2000)、伊藤崇達(2009)、中谷素之(2012)、Wigfield, Tonks, & Eccles (2004)の論に、稿者の解釈を加えて、表1のようにまとめた。表1に整理した諸段階と諸過程における構成要素を取り入れた振り返りシートを作成し、活用させていく。

（2）構想図について

これまで述べてきたように、主体的な学びを実現するための工夫として、探究のプロセスの中に、自

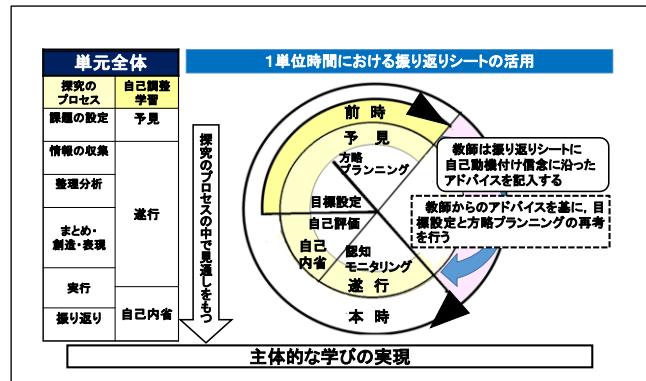


図2 本研究における構想図

己調整学習の過程である課題分析、自己動機付け信念、自己観察、自己判断を取り入れていく。また、1時間の流れについても、表1にある自己調整の過程を取り入れることとする。さらに、児童が探究のプロセスの中で見通しをもつために、表1の構成要素である課題分析、自己動機付け信念及び自己評価を取り入れた振り返りシートを学習活動の中に取り入れ活用する。本研究の構想図を図2に示す。

（3）単元計画について

自己調整学習のサイクルの長さについてZimmerman (2000) は、学習者の目標とフィードバック次第で数分から数年に変わるように、フィードバックの頻度と質は、意味のある程度に自己調整できると述べている。本研究では、単元を計画するに当たって、学習活動の中で、児童に見通しをもたせるため、図

単元名	フレンドシップ・プロジェクト		
目標	障害者に関わる体験や交流をきっかけに、福祉に関心をもち、相手の立場に立って考え、自分たちができる事を実践しようとする。		
ゴールの児童の姿	「自分のよさを知り、お互いのよさを生かし合い、進んで活動に取り組む児童」		
【スキル】課題発見・解決力 ア 工夫された課題の提示によって興味・関心をもち課題を自らのものと捉える。 イ 相手や目的や意図に応じて手段を選択して情報を収集する。 ウ 既習の知識や調査・体験で得たことを整理し、次の課題を見付ける。 エ 調査や体験から得た情報を活用して表現力を育成する。	【意欲・態度】主体性・積極性 ア 課題の解決に向けて、自分の思いをもちながら取り組み、最後までやり遂げる。 イ 課題の解決に向けて、他者と協働して進んで取り組もうとする。 ウ 学校内外の人と積極的に関わろうとする。	【価値観・倫理観】自己理解・自らへの自信 ア 相手意識をもって、自分の考えを相手に伝える。 イ 他者と協働して、課題を解決することを通して自他のよさを認め合う。	
探究の過程	自己調整学習	学習内容（全25時間）	
情報の収集	【情報の収集】 【振り返り】	「振り返リシートの活用」 予見段階・自己内省段階において、振り返リシートの記入をして児童の授業への見通しをもたせる。	<p>「福祉」って何だろう？（6時間）</p> <p>①福祉について知る。 ②聴覚障害について知る。 ③アイマスク・車いす体験をする。 ④盲導犬と暮らす視覚障害の人と触れ合う。</p> <p>【研究授業1】</p> <p>⑤これまでの学習を振り返り、新たな課題をもつ。</p>
課題の設定	【情報の収集】 【振り返り】 【課題の設定】	予見 遂行 自己内省 予見 遂行 自己内省 予見 遂行 自己内省 予見	<p>【フレンドシッププロジェクト】（11時間）</p> <p>⑥町の現状を知る（G.T） ⑦現地調査をする。</p> <p>【研究授業2】</p> <p>⑧これまでの自分の考えをまとめ、新たな課題をもつ。</p> <p>【研究授業3】</p> <p>⑨課題を決め、学習計画を立てる。</p>
情報の収集	【情報の収集】	遂行 自己内省 予見 目標設定 方略プランニング 認知モニタリング	<p>⑩体験活動等を通して、情報収集したい内容を見付ける。 ⑪情報収集する。</p>
整理分析	【整理分析】	自己内省 自己評価 予見 目標設定 方略プランニング 認知モニタリング	<p>⑫調べたことを交流し、まとめる。 ⑬発信先を決めるため、アンケート調査を行う。 ⑭アンケート集計を行う。</p>
まとめ・創造・表現	【課題の設定】	自己内省 自己評価 予見 目標設定 方略プランニング 認知モニタリング 遂行 自己内省 自己評価 予見 目標設定 方略プランニング 認知モニタリング 自己内省 自己評価 自己内省 自己評価 自己内省 自己評価 自己内省 自己評価	<p>【研究授業4】</p> <p>⑮アンケート結果から、次への学習活動の見通しをもつ。</p> <p>優しい町「坂町」を伝えよう。（8時間）</p> <p>【研究授業5】</p> <p>⑯発信に向けて計画を立てる。 ⑰中間報告会の準備・リハーサルをする。 ⑱中間報告会を開き、アドバイスを聞く。 ⑲アドバイスを基に、改善する。 ⑳準備・リハーサル</p>
実行	【実行】	自己内省 自己評価 予見 目標設定 方略プランニング 認知モニタリング 遂行 自己内省 自己評価 自己内省 自己評価 自己内省 自己評価	<p>㉑報告会を開く。</p>
振り返り	【振り返り】	自己内省 自己評価	<p>㉒単元の振り返りをする。</p>

図3 本研究の単元計画

3に示すように、探究のプロセスの中に自己調整学習の諸段階と諸過程を取り入れる。本単元では、単元の学習活動のゴールを児童と共有し、自己調整学習を取り入れて、見通しをもって活動に取り組めるよう計画した。

(4) 見通しをもたせる振り返りシートの活用について

佐藤真（2010）は、自己調整学習において、見通す目的・内容や振り返る位置・内容等を児童が整理し、分析し、統合しながら、常に自らの学習を自分自身で調整することが、学習意欲を向上させるとともに思考力・判断力・表現力を育むためには重要であると述べている。

塚野(2016)は、自己調整過程や自己動機付け信念は親教師、友だちの指導とモデリングから学ぶこと

ができると述べている。また、岡田涼（2012）は、学習を自己調整する能力を発達させる初期段階では自律的支援という観点から、教師が十分な役割を担うことができると述べている。これらのことから、児童の発達段階を考慮した教師の支援として、振り返りシートへアドバイスを記入することは、児童に予見段階の自己動機付け信念を促し、児童自身による動機付けへと発展させ、主体的に学ぶために有意であると考える。

そこで本研究では、児童が見通しをもち、目的をもって主体的に学習するため、自己調整学習の過程を取り入れた振り返りシートを作成し、活用する。本研究における振り返りシートは、1単位時間の目標設定と方略プランニングに係る項目と自己評価に係る項目に大きく分かれており、それぞれに教師の

学びの振り返りシート【月日()】 4年組番 氏名()	
○ 学習のめあてと計画を立てましょう。	
月 日のめあて ※ 学級で設定した次時の学習目標について記述する。 ※ 前時の終末に決定する。 自分のめあて ※ 個人の目標について記述する。 ※ 前時の終末に記述しておき、本時までに再考する。 学習計画を書こう ※ 方略プランニングについて記述する。 ※ 前時の終末に記述しておき、本時までに再考する。	
○ 今日の学びについてふり返りましょう。 学習計画について <small>計画どおりにできた (4・3・2・1)</small> ※ 方略プランニングについて4段階評価を行う。 今日学習したことについて <small>とき</small> ※ 自己評価について記述する。 ※ 次時の目標設定、方略プランニングに生かす。	
アドバイス	
※児童が次時の課題分析を記入した後、教師が自己動機付け信念に基づいたアドバイスを記入する。	

図4 本研究における振り返りシート

アドバイスを記入する欄がある。目標設定と方略プランニングに係る項目は前時の自己評価に、自己評価は次時の目標設定と方略プランニングに明確につなげていく。作成した振り返りシートを図4に示し、活用方法について述べる。

まず、児童は本時の振り返りシートの目標設定と方略プランニングについて目を通す。そこには前時の終末に児童が設定した本時の学習目標と個人の目標設定、方略プランニング及び教師によるアドバイスが書かれている。児童は、教師からのアドバイスを基に、個人の目標設定と方略プランニングについて本時までに再考し、修正・加筆を行っておく。そして児童は、本時の展開に当たる遂行段階を経て、自己内省の段階において、自己判断過程の構成要素である自己評価を振り返りシートに記入する。ここでは、予見段階で行った目標設定と方略プランニングを基に、遂行段階で使用したワークシートを見直しながら、自己評価を行う。自己評価が終わると、児童は各自の自己評価を基に、次時の予見段階である学習目標について話し合い、個人の目標設定と方略プランニングを行い、次時の振り返りシートに記入する。教師は本時までに振り返りシートを見て必要に応じてアドバイスを行う。アドバイスの視点は、予見段階の自己動機付け信念に係る構成要素を基とする。教師が児童に記述するアドバイスの視点について表2に示す。また、単元全体を児童自身が見通し

をもって取り組むことができるよう、単元における振り返りシートも用意する。児童が記入した振り返りシートとワークシートは、ポートフォリオとし、児童自らが学習の流れを自覚し、見通しがもてるようにしておく。

このように、振り返りシートを活用することで、児童自ら学習への見通しをもち、目的をもって主体的に学ぼうとするサイクルが展開していくと考える。

表2 児童の自己動機付け信念を促すアドバイスの視点

段階	構成要素	アドバイスの視点
予見	自己効力感	意欲につながるプラス評価をする。
	結果期待	目標達成のための見通しがもてたり意欲がもてたりする方法を示す。
	課題価値/関心	学習行動を喚起しやすくする具体的な学習方法について示す。

III 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

総合的な学習の時間において、探究のプロセスと自己調整学習の三つの段階を取り入れた振り返りシートを使って、本時の振り返りと次時の学習目標及び児童の自己動機付け信念を促す教師のアドバイスを基にした課題分析が行えるよう指導をすれば、児童は主体的な学びを実現できるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表3に示す。

表3 検証の視点と方法

検証の視点	方法
1 単位時間の振り返りシートを活用し、継続的に指導と評価を行うことで、主体的な学びを育成することができたか。	振り返りシート

IV 研究授業について

- 期間 平成28年11月30日～平成28年12月20日
- 対象 所属校第4学年1組(29人)

V 研究授業の分析と考察

1 研究授業の概要

本単元では、坂町にある体の不自由な人が安心して利用できる施設があることを地域の人に知らうため、児童ができる事を考え、実践する活動

表4 検証授業の概要

学習活動	研究授業1 学習活動⑤	研究授業2 学習活動⑧	研究授業3 学習活動⑨	研究授業4 学習活動⑯	研究授業5 学習活動⑰	
探究のプロセス 【課題の設定】	振り返り	課題の設定	課題の設定	課題の設定	課題の設定	
本時の 学習目標	これまでの体験活動を振り返り、誰もが安全で安心して暮らせる町とはどんな町か考え、新たな課題をもつことができる。	役場の人の話や駅周辺等の調査結果を振り返り、これから学習に対する見通しをもつことができる。	相手意識をした課題解決に向けての学習計画を立てることができる。	アンケートの集計結果から、自分たちが伝えたいことや伝えたい相手について意見交流し次への学習への見通しをもたせる。	発信する相手や目的に応じた方法を決め、計画を立てることができる。	
予見の 再考	グループによる学びの振り返り	前時の振り返り	「情報収集」の過程までの振り返り	「情報収集」までの振り返り	前時の振り返り	
本時の学習目標の確認 【振り返りシートの活用】						
本 時 の 流 れ	遂 行	<ul style="list-style-type: none"> ○ グループで「優しい町」(誰もが安心して暮らせる町)について情報交流をする。 ○ 今後の学習課題について意見交流をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ これから学習課題に向けて、これまでの学習を振り返りながら、自分の考えを書く。 ○ 意見をペアで交流した後、全体で話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 道のりという言葉の意味を確認する。 ○ 発信までの道のりを考える。 ○ グループで交流後、計画を立てて、全体で話し合う。 ○ 全体で交流し、計画を立てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ アンケート結果から個人・グループで考える。 ○ グループの意見を全体で交流し合う。 ○ 意見交流をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 今日の学習課題について確認する。 ○ 発信の仕方をグループで考える。 ○ 単元振り返りシートを使って発信までの計画を立てる。 ○ 発信までの計画を立てる。
自己内省	振り返り 【振り返りシートの活用】					
予 見	次時の学習目標と学習内容の検討 【振り返りシートの活用】					

表5 振り返りシートを見取るための評価基準

段階	構成要素	IV	III	II	I
予見	目標設定	本時の学習目標を達成するために児童自身が積極的に取り組める具体的な目標を設定している。	本時の学習目標を達成するための個人の目標を設定している。	本時の学習目標と関連性がない個人の目標を設定している。	無記入
	方略プランニング	本時の学習目標と個人の目標に関連した具体的な方略を設定している。	本時の学習目標に関連した方略を設定している。	本時の学習目標に関連性のない方略を設定している。	無記入
自己内省	自己評価	個人の目標についての達成状況及び次時への学習サイクルについて振り返りをしている。	個人の目標や方略プランニングについての振り返りをしている。	個人の目標や方略プランニングについて関連のない振り返りをしている。	無記入

を行う。単元を通して、単元の最終的な活動目標である「優しい町『坂町』を伝えよう」を常に児童が意識をもって活動ができるよう課題の設定での研究授業を行う。検証方法は振り返りシートにおける児童の変容から見取る。これらの一連の授業の概要を表4に示す。なお、研究授業1は、自己調整学習を取り入れた授業展開のガイドラインも踏まえた学習と捉え、研究授業2から表5の評価基準を基に学習の到達度を見取っていく。また、振り返りシートに表2に示した自己動機付け信念を促す教師からのアドバイスを行い、その後の児童の変容についても見取っていく。

2 1単位時間の振り返りシートを活用し、継続的に指導することで、主体的な学びを育成することができたか

振り返りシートに記入した児童の記述の変容について、図5から図8へ示す。図5は予見段階における個人の目標設定の記述、図6は方略プランニング

の記述について、表5の評価基準により見取ったグラフである。

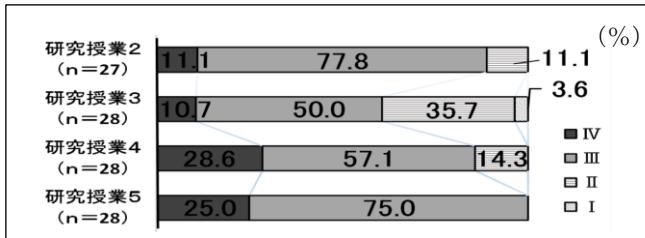


図5 予見段階における目標設定の結果

図5を見ると、IV及びIII段階の児童が最終的には増加したが、研究授業3では、減少したことが分かる。減少した理由として、児童が学習目標から個人の目標を設定することが難しかったことや児童が学習計画を立てる際、これまでの学習が想起できる掲示の工夫など、学習環境が不十分であったことが考えられる。この課題を踏まえ、児童が行う目標設定や方略プランニングの再考の仕方について見直したところ、研究授業4以降、IV及びIII段階の人数の割合が大きく增加了。当初、目標設定と方略プランニングについての再考は、振り返りシートに記述された教師によるアドバイスを受け、児童自らが本時までに、アドバイスを基に再考することを想定していた。しかし、再考した内容を修正・加筆する時間を児童自身が確保することが難しいと判断し、研究授業4以降、授業の導入時に目標設定と方略プランニングを再考する時間を設けた。この見直しが児童にとって有効であったため、IV及びIII段階の人数が增加了と考えられる。

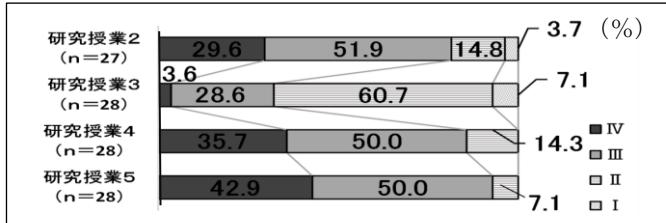


図6 予見段階における方略プランニングの結果

図6でも、図5の目標設定と同様、研究授業3での振り返りシートの記述についてIV及びIII段階が減少したが、研究授業4からIV及びIII段階の児童が増加した。研究授業4では、IV段階の児童10名のうち9名、III段階の児童13名のうち9名が、それぞれ目標設定と方略プランニングを再考した内容を振り返りシートに記述できていた。教師によるアドバイス

を基に方略プランニングを再考し、評価基準の段階が上がったものを表6に記す。

表6 方略プランニングの再考による児童の記述の変容

	記述	教師のアドバイス	再考後の変容
児童A	<ul style="list-style-type: none"> ・素早くする。 ・分かりやすく説明する。【III】 	<ul style="list-style-type: none"> ・何を素早くしますか？詳しく書いておくと様子がよく分かり、実行しやすいです。【自己効力感】 	<ul style="list-style-type: none"> ・役割を決めて、話合いを素早くする。 ・話合いのとき自分の考えを友だちに分かりやすく説明する。【IV】
児童B	<ul style="list-style-type: none"> ・どういうふうに発信するか考える。 ・考えられたら発表する。 ・内容はどのようになつたかちゃんと聞く。 ・考えられたら発表する。 ・伝える相手はどういうふうにするか考える。【III】 	<ul style="list-style-type: none"> ・伝える相手や伝える内容を決めるために、どのようにしていけばよいか、具体的に考えて整理してみましょう。 ・①②③…と番号を付けてみましょう。【結果期待】 	<ul style="list-style-type: none"> ①どういうふうに発信するか考える。 ②伝える相手を誰にするか決める。 ③内容はどうするかちゃんと話し合う。ちゃんと聞く。【IV】

児童Aは、自分の思いを書くことで表現することが苦手な児童だが、教師のアドバイスを読むことで、本時の学習活動についてのイメージが湧き、具体的な計画を立てることができた。児童Bの個人の目標設定は「伝える内容と相手について、協力して決める。」というものだった。授業後、児童が協力して活動できたと思うためには、活動内容を具体的に表記することだと考え、アドバイスを行ったところ、児童は、伝える相手を意識して内容を考え、順を追って計画を立て、修正することができた。

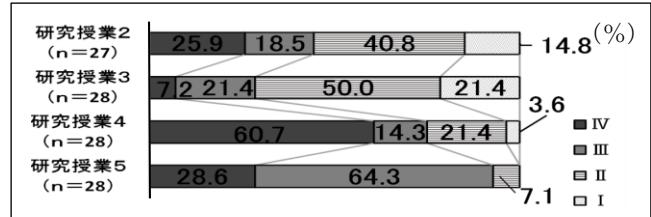


図7 自己内省段階における方略プランニングについての自己評価の結果

図7、図8は、児童が本時の終末の振り返りシートに記述した自己評価を表5の評価基準を基に、見取ったグラフである。図7、図8においても予見段階の記述と同様、研究授業3での振り返りシートの記述についてIV及びIII段階で減少傾向が見られた。

その要因として、振り返りシートの自己内省の記入欄に、児童が何を記述すればよいか、具体的な説明がなかったことから、児童は目的が分かりにくく、授業の感想を書いたものが多かったことが挙げられる。本時の学習を自己評価したことが、次時への予見段階につながる記述ができる振り返りシートに改善する必要があると考えた。振り返りシートの改善について表7に示す。

表7 振り返りシートの改善

今日学習したことについて	
改善前	改善後
今日学習したことについてのとき、	今日学習した45分間を振り返りましょう。「めあて」を基に、初めて発見したことや次の学習に役立つこと、次の学習に向けて気になる問題点など気付いたことを書きましょう。

振り返りシートの改善を行った結果、研究授業4では、IV及びIII段階の記述をした児童が増加した。研究授業5では、I段階の児童が0名になった。自己内省は表1にあるように、予見段階の個人の目標設定が自己評価の基準になることから、予見段階での目標設定及び方略プランニングが明確なものであれば、児童は振り返りを通して、次時へ更には単元のゴールに向かって見通しがもてると考えられる。振り返りシートの改善は、児童が授業への見通しをもつために有効であり、児童は見通しをもって、主体的に学習に取り組むことができたと考えられる。また、研究授業5は、探究のプロセスの実行までの計画を立てる学習活動であった。児童は進んでこれまで蓄積したシートを見直し、比較することで見通しをもった記述ができた。

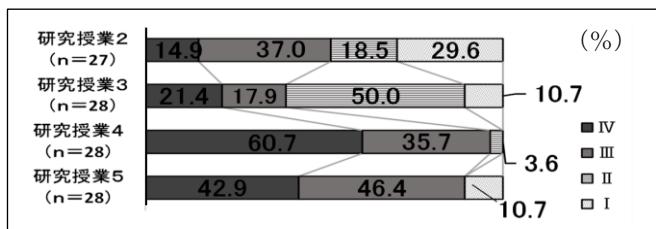


図8 自己内省段階における学習活動についての自己評価の結果

図8の自己評価は、学習活動についての振り返りのため、遂行段階の学習活動の内容が反映されやすい。研究授業5において無記入の児童が3名と増加

した。これは、個人の目標設定が明らかになったことで、遂行段階のグループ活動により、他の児童の考えに影響を受け、個人の目標の達成が難しかったと考えられる。個人の目標設定をする場合は、本時の学習目標と個人の目標の整合性が図れているか指導していくことが重要であると考える。よって、本時の学習目標と個人の目標設定についてのつながりを考えた振り返りの指導については今後の課題である。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

総合的な学習の時間において、学習活動の中で見通しをもたせるために自己調整学習の三つの段階を取り入れた振り返りシートを活用した授業を展開した。授業の終末に次時の学習目標の設定、個人の目標設定と方略プランニングを行い、教師のアドバイスを基に本時で再考をしたこと、児童の実態に合わせた振り返りシートの改善を行ったことにより、児童は授業において、本時の振り返りを生かした次時への課題分析を行うことができ、見通しをもって学習に取り組むことができた。学習活動を通して、児童は、主体的な学びを実現することができたと考えられる。

2 研究の課題

今回の授業では、1単位時間当たりの自己調整学習に焦点を当てて指導した。今後は、児童が主体的に学ぶために単元全体の流れに沿った振り返りシートを活用した指導を充実させていく必要があると考える。また児童の主体的な学びを充実させるためには、自己内省段階への影響に関わる遂行段階についての指導を工夫し、更に児童が見通しをもてる振り返りができるよう振り返りシートを改善していく。

【引用文献】

- 1) 文部科学省（平成28年）：『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ』p. 331
- 2) 広島県教育委員会（平成27年）：『平成28年度広島県教育資料』p. 95

【参考文献】

- 中央審議委員会（平成28年）：『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』
 バリー・J・ジーマーマン（2009）：『自己調整学習の動機づけ』北大路書房
 岡田涼・中谷素之・伊藤崇達・塚野州一編著（2016）：『自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術』北大路書房
 伊藤崇達（2009）：『自己調整学習の成立過程』北大路書房